

# 大東アレル帳

(10)

## 「キャンプ場の夕べ

猛暑の街から逃れるようにして、龍間のキャンプ場へ登った。

ぬけるように青い空、はるか西の山々の陰から入道雲、その裏に、太陽は雲の輪郭を光となし身をかくす。

頭の上には、ポッカリと半月が浮いている。

真昼の太陽がギラギラ照りつけ、万物を焼け焦がしてしまおうのではないかと思われるような街中であつて、人も、草も木も、犬や猫までも、一様に物憂い表情であつた下界の風景と比べれば、ここは、まさに別天地という感じがする。

真新しい炊事場では、子供たちが忙しそうに食事の後片付けをしている。

のびやかに動く手、笑っている顔、カレーの名残をつけたまま、そこら辺りを

走り回る小さな子供たち、

どの子の目もとても生き生きと輝いている。こんな子供の姿に出会つたのは、ずいぶん久しぶりのような気がする。

キャンプ場の裏には、昔、竜が住んでいると伝えられた桜池が、神秘的な水をたたえて静まりかえつていた。

その中ほどに、巨大な竜の角でも出ているのかと思わせるように、枯れた木が水面から立ち上がっている。

そして、うす桃色のねむの木の花が、やさしくやさしく風に揺れていた。

やがて、西の稜線に朱を残して日が沈むと、

夕焼け こ焼けで

日が暮れて

山のお寺の 鐘がなる

なつかしい歌声に合わせ、子供たちはキャンプファイヤーの準備にかかる。

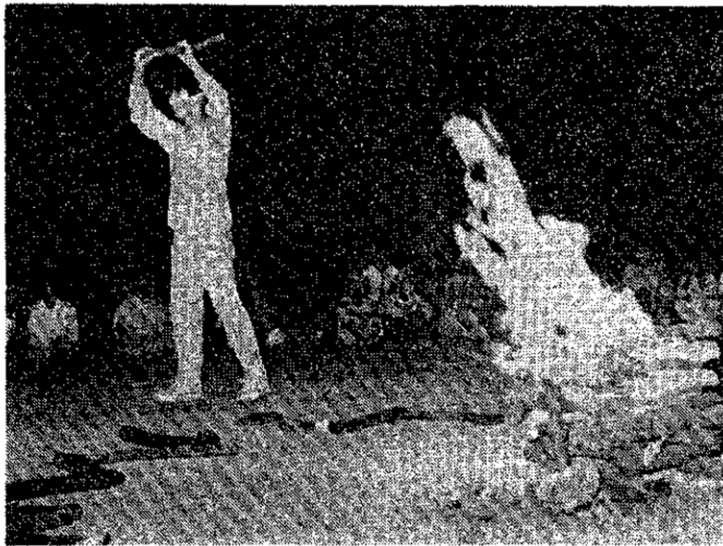
すべての照明灯が消され、山に闇と静けさが戻つたとき、どこからともなく一本の松明かりが近づき、大きな歓声と拍手の中を巡り巡って、中央の薪に火がともされた。

燃えろよ 燃えろよ

炎よ 燃えろ

火の粉を まき上げ

天まで 焦がせ



キャンプファイヤーに火がともされ、子供たちの心は一つに

歌いながら見つめる子供たちに、子供たちの元気な声がちの瞳の中で、炎はほとんど呼応して、星空に響いていく。それは、そのまま子供たちの夢と希望の炎となり、大きな笑い声。一人ひとりの心の中で、いつまでも燃え続けて欲しいと思つた。

ちよっぴり恥ずかしそうな山のリーダーたちの声

文・水谷信子